
色彩フラワー魔女

sinne-キノリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

色彩フラワー魔女

【Nコード】

N1900Y

【作者名】

s i n n eーキヨノリ

【あらすじ】

今まで普通に暮らしてきた少女、リンカ。

レッドカーネーション

彼女は、赤い花の魔女クミカとの出会いによって、魔法使いになる。

そして、化け物との戦いに身を投じる事となる。

第一輪目「二赤い花《レッドカーネーション》」(前書き)

今日登録して一気に二つも連載はじめてしまったW馬鹿だW W

第一輪目「一赤い花《レッドカーネーション》」

「♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪」

始めまして！私はリンカ。カーネーションが好きなごくフツートの小学四年生！

「おはよう！リンカちゃん、今日も元気だね！」

こっちは友達のラクラちゃん。桜が好きなクラスメイト。

「今日って、確か母の日だよね？」

「そうそう！ラクラちゃん、今日、私お母さんにカーネーション渡すんだ！」

「あ、あの自分で育てたって言ってた？」

「うん！だからね、今日家に帰ったらお母さんに手紙付けてあげるんだ」

「ねえ、リンカちゃん、将来の夢ってある？」

「うーん、魔法使いとか！」

「あ、例の伝記の？」

「うん！」

普通の毎日。

普通の友達。

それが私、うーん、私たちにとっての普通というものだった。

私達の、本当を知るまでは。

【彼女達が、ウィッチ・ブラッディン魔法の血を継いだもの？】

【みたいだね】

【もうすぐ、時が来る。彼女達に、本当を教えなくちゃ】

いきなり、空が暗くなった。

「何？」

「・・・これって・・・」

「2人とも逃げて〜!!」

「ふえ？」

私達の前に、いきなり女性が現れた。

「これは、どういう・・・」「早く〜!」

「わ、分かりました!」

私達は、言われるがままに逃げた。

【オマエ、ウィッチ・ブラッディンヲニガシタナ〜。オマエ、マジヨカ〜?】

「うん〜、そうだよ〜。私の名前はクミカ〜。レッドカーネーション赤い花の魔女〜」

【ソウカ、マジヨヲタオスノガオレタチノシメイ、オマエモタオスゾ〜!!】

「貴方に〜、私は倒せないよ〜」

「す、凄い・・・」

「本当に・・・」

私達は、クミカと名乗った魔女と、化け物の戦いを見ていた。

「それにしても、化け物の言ってた、ういっち・ぶらっでいんって、何？」

「わ、私に聞かれても・・・」

「だよね・・・」

「ぐはあっ!」

【ホラ〜、オレニモオマエハタオセル〜、ウソツキハヨクナイゾ〜】
「クミカさん!」

【ウィッチ・ブラッディン、ミ〜ツケタ〜】

「だ、駄目〜!」

化け物は私達の方へやってくる・・・。怖い!

「いや・・・嫌だ・・・」

「リンカちゃん！魔法使いになるの～！！そうすれば～！この化け物を～倒せるよ～！！」

魔法使いに・・・？

「魔法使い・・・」

「そうなの～！！リンカちゃんは～、魔女の血を継いでるの～！！」

「私が、魔女の血を継いでる？」

昔伝記で読んだ魔女や魔法使いの話。

私が、魔法使いになれるの？

「レッドカーネーション赤い花・・・」

私は化け物に目を向けた。

「私は、魔法使いになる！」

「リンカちゃん・・・」

「レッドカーネーション赤い花の魔法使い！リンカ！！」

その時、私の周りを赤い、カーネーションの花びらが包んだ。

「これが・・・魔法使いの力・・・」

【ウィッチ・ブラッディンがメザメタ～！！】

これが、私の戦いの始まりだった。

第二輪目「伝説の魔女」(前書き)

二話目投稿！

第二輪目「一一伝説の魔女」

昔お母さんに聞いた伝記。

『リンカ。昔々。あるところにね、魔女や、魔法使いがいたの』

『魔女や、魔法使い？』

『ええ、魔法使いは、魔女の見習い。魔法に目覚めたばかりの魔女なの』

『凄いー！！ねえ、リンカも、魔女になれるかな？』

『ええ、なれるわよ。でも、リンカ。まだ気が早いわ。魔女になるには、まだ、魔法使いにならないといけないわよ』

『むゝ。分かった！じゃあ、リンカ、まず魔法使い目指す！』

昔に言った言葉。

今思い返せば恥ずかしいかもしれないけど。私は魔女になりたかった。

まだ、夢を見ていた。

その夢が、今現実になろうとしている。

レッドカーネーション
「赤い花・・・」

「リンカちゃん・・・凄い・・・」

「やっぱり、あの人の娘さんだな」

「あの人？」

「うん、あの人。・・・うつ！」

「大丈夫ですか？クミカさん。傷が・・・」

【ハナシテナイデ。ハヤクアソボ】

「言われなくとも、戦ってあげる！！」

私は飛び出していた。

誰かが傷つくのが嫌いなんだ。

私は、杖を持って、手をかざしていた。

レッドカーネーション

「赤い花よ。我に力を与えたまえ。そして、灼熱の炎で汝を燃やし尽くす！！」

【ナンド？】

「嘘・・・あれって・・・」

「リンカちゃん・・・これは・・・」

頭に流れてくる。全てが。

これが、魔法使いの力・・・。

「凄いよ。リンカちゃん！！やっぱり、あの人の娘さんだよ」

「あの人？」

「うん、伝説の魔女ルンラと、その使い魔、ロンドの娘さん」

「お母さんって、伝説の魔女なの！？」

「そうだよ」

「へえ、ねえねえ、魔女ってさ、女の人しかいないんだよね？」

「うん。その子供も女の子しか生まれないよ」

その時、私とラクラは、疑問に思った事が、一つある。

「女の子か・・・生まれない？」

ラクラが言った。

「ん？ラクラちゃん。どうしたの？」

「クミカさん、正直な話。私には、双子の弟が居るんです」

「ええ！！？？」

第二輪目「――伝説の魔女」(後書き)

さて、性転換フラグ出てしまったWWWWW

第三輪目「魔法使いの少年」(前書き)

しばらくぶりすぎてすみません…。
リンカ「本当だよ！」

第三輪目「魔法使いの少年」

「魔女からは男の子は生まれねはずなんだけどな」

クミカさんはそう呟く。

私の弟のリレン。その存在はクミカさんにとっては信じがたい事だったらしい。

「本当に血の繋がった双子なの？」

クミカさんは執念に私に尋ねる。

「は…はい…」

「そうか」

私の返答にクミカさんは考えるような姿勢をとる。

「あ、あの…」

話について来れなくなったのかラクラちゃんが言う。

「此处で話しても何も無いし。クミカさんはリンカちゃんのお母さんの事知ってるみたいだからとりあえずリンカちゃんの家に行ったら？クミカさんも怪我…してるし…」

ラクラちゃんの言葉はもったもっただった。

クミカさんの怪我はかなり深い。『魔女』と言うのならクミカさんは自分の怪我を治している筈なのに。

「だ…ね…」

そう言いながらクミカさんは倒れた。その体は徐々に縮んでいって、私達と同じくらいの大きさになった。

「あれ？クミカさん？何が起こったの！？」

「と…とりあえずリンカちゃんの家に行こう！リンカちゃんのお母さんが何か知ってるかもしれないし…」

「だね…」

私達はとりあえず家に帰ることにしたの。

+++++

「リンカ！大丈夫？ラクラちゃんも…早くこっちに来て」

私達が家に帰った時私のお母さん…ルンラはとても心配そうな顔をしていた。

下校時間からかなり過ぎてしまったからだと思っただけで謝った。

「ごめんなさい…」

「とにかく、リンカもラクラちゃんもこっちに来なさい…」

お母さんに言われて私達はお母さんの居るリビングに来る。怒られる覚悟はしている。連絡も無しに家に帰る約束の時間より過

ぎちゃったし…。

「無事でよかったわね…。リンカ…レッド・カーネーション赤い花に目覚めたんでしょ？ 其処の子が二人を助けてくれたのね…」

お母さんは私達が来るなり私の背負っていたクミカさんをソファに寝せて、私とラクラちゃんに向かって話しかけた。

とても真剣な顔で、私とラクラちゃんは聞く覚悟をしている。

「魔女や魔法使いは…本当に居るのよ。私だってその力を持っている。そして、二人も魔法使いになれるの。勿論リレンもよ」

「え、でもクミカさんは魔女から男の子は生まれないって…魔法使いにも男の子は居ないって…」

お母さんの言葉に私は戸惑った。リレンは男の子なのに！？クミカさんが嘘を言うはずも無いし…。

私は頭の中がこんがらがった。

「混乱してもおかしくないわね…。リレンは確かに男の子。私も生んだ時はとても驚いたわ…でも確かに魔法使いになれる資格を持っていたの」

「じゃあ、リレン君も魔法が使えるんだ！私達二人とリレン君で…って二人って事は…私もなんですか！？」

ラクラちゃんは納得して話を整理する。だけど私達…二人とリレンっていう事はラクラちゃんも魔女の血を継いでる事になるって…ラクラちゃんも！？

「ええ、ラクラちゃんのお母さんもれっきとした魔女よ。私とスズラとマスリィとクミカの四人で幼馴染なんだから」

お母さんは自慢げに言う。

ええ！？クミカさんが何故お母さんの事を知ってたのか？って思ったら幼馴染だったの！？

「うーん、そうだよーリンカのお母さんのルンラとは幼馴染なんだ」

何時の間にか起きてたクミカさんが言う。

「全く、久々に会ったと思ったらこんな子供の姿で…で、どうするの？魔女や魔法使い。あと魔女の血を継いでる子達が危ないんですよ？」

お母さんは呆れ気味にクミカさんに言う。

クミカさんの姿はさっき私達を助けてくれた成人女性とは違う姿だった。

さっきの姿は恐らく20歳くらいだったのに今の姿は10歳くらい。

「あはは…油断してたらね」

「油断禁物。これは魔女としての当然の事でしょう？全くその姿じゃろくに魔法も使えないわよ。せいぜい使えて軽い発火や浮遊くらいね…」

何だか難しい話をしているお母さんとクミカさん。

私とラクラが話においてないって分かったのかお母さんは私達

に向き合った。

「とにかく…私達が二人の魔法の先生って事になるわね…」

「あ！私は…まだ心の準備が出来てないので…じゃあ、今日はこの所で帰ります。有り難うございました」

時計を見てラクラちゃんは帰る。

私にはあまりラクラちゃんが帰った理由は分からなかったけどお母さん達は分かっているらしくて私も何があったのか聞かなかった。

「ラクラちゃんはまだ心の準備が出来てないのね…」

お母さんはそう呟いた。

私は何を聞きたかったのか分かったみたいでクミカさんが私に言った。

「ラクラちゃんはね…まだ突然の事で頭が追いついてないんだようリンカちゃんみたいに前から魔女や魔法使いの事を知っていたならまだ良いんだけどあの子は今魔女や魔法使いの存在を知ったからね…」

クミカさんは「うーん…」と言って悩んでるみたいだった。

その時リレンが帰って来た。

「ただいま…って…お客様？」

「お邪魔してます…」

「お帰りリレン！」

「お帰り、部活はどうだった？リレン」

リレンは帰ってきてクミカさんを見て驚いた顔をする。

クミカさんはリレンをじーっと見て言う。

私はリレンにいつもどおりに出迎える。

お母さんはリレンに部活の様子を尋ねる。

リレンは部活に入ってるの。ちなみに野球部なんだって。私は部活よりも自分で勉強したり遊んだりが好きだけどね。

「えっと…母さん、部活はレギュラーになれたけど…あと、リンカ
ただいま…」

リレンはじーっと視線を送っているクミカさんが気になるようで、
チラチラとクミカさんの方を見ながら言う。

「君が、リレン君？」

クミカさんはいきなりリレンに話しかける。

リレンはとても驚いたみたいで「え？え？」って言いながら答える。

「は…はい…。あの、君は…」

「あゝごめん自己紹介が遅れたねゝ私はクミカゝ魔女だよゝ」

「魔女？魔女って本当に居たのか？」

クミカさんの言葉にまだ頭の上に「？」があるリレン。

リレンも魔女や魔法使いの話は知っていたけど本当に居ると…しかも目の前に居ると言われて混乱してるみたいなの。

「そうだよーほら！ルンラもー」

「はいはい…リレン、私達は魔女なの、だからリンカやリレンは魔法使いの資格を持っているの。ちなみにラクラちゃんも魔法使いになれるの」

お母さんも話を始めてリレンは「信じるしかないのか…」と言って話を聞いていた。

暫くして話が終わったようでリレンとクミカさんとお母さんは私の方を向いた。

「じゃあ、特訓と行きましようか。特にリレンは狙われやすいしね」

「俺も!？」

「つべこべ言わない」

「はい…」

お母さんの気迫にやられてリレンは仕方なく私とクミカさんと一緒に地下に行く。

「地下室なんてあったんだね…」

「うん、魔女や魔法使いはあまり人にばれないように生きるからね」

「おきてとかになってるの？」

お母さんの言葉に疑問を持った私はお母さんに尋ねる。

「ううん、別にそういうわけじゃないけど…そうした方が普通の人達に刺激を与えないしね」

「へえ」

「じゃあ魔法使いに変身してみようか」

クミカさんは私とリレンに向かって言う。

クミカさんは魔方阵を描き始めた。

何だか緊張が走って来た。

続く

第三輪目「魔法使いの少年」(後書き)

リレン「ちよつと待てよ！何だか微妙な終わり方じゃねえか！」

リンカ「まあまあリレン待って」

ラクラ「そうだよ…」

クミカ「じゃあ次回もお楽しみに」

ルンラ「出来るのかしらね？」

クミカ「多分…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1900y/>

色彩フラワー魔女

2012年1月7日13時51分発行